

国立国会図書館 調査及び立法考査局

Research and Legislative Reference Bureau
National Diet Library

論題 Title	開会挨拶
他言語論題 Title in other language	Opening Remarks
著者 / 所属 Author(s)	綾部 広則 (AYABE Hironori) / 早稲田大学理工学術院教授、国立国会図書館客員調査員
書名 Title of Book	「科学技術立国」を支えるこれからの研究者育成: 科学技術に関する調査プロジェクト報告書 (Fostering Future Researchers in Support of the Science-and-Technology-Oriented-Nation Concept)
シリーズ Series	調査資料 2019-4 (Research Materials 2019-4)
編集 Editor	国立国会図書館 調査及び立法考査局
発行 Publisher	国立国会図書館
刊行日 Issue Date	2020-02-28
ページ Pages	—
ISBN	978-4-87582-854-9
本文の言語 Language	日本語 (Japanese)
摘要 Abstract	—

* この記事は、調査及び立法考査局内において、国政審議に係る有用性、記述の中立性、客観性及び正確性、論旨の明晰 (めいせき) 性等の観点からの審査を経たものです。

* 本文中の意見にわたる部分は、筆者の個人的見解です。

開会挨拶

早稲田大学理工学術院 教授

国立国会図書館 客員調査員 綾部 広則

早稲田大学の綾部と申します。本日はお暑い中、お越しいただき誠にありがとうございます。本日のシンポジウムは、「科学技術立国」を支えるこれからの研究者育成」です。科学技術立国を支える方策についてはいろいろありますが、やはりヒト、モノ、カネをどう適切に配分するかが大きな問題ではないかと考えます。ただし、こうした大きな問題の全体いきなりアプローチすると論点が拡散しますので、今回は特に、ヒトの側面、つまり人材育成という点に絞ることにしました。

もちろん、人材育成に関しては、既に高等教育をご専門とする方々や科学技術政策の分野でも多くの研究蓄積がございます。また、かつて深刻な問題となったオーバードクター（OD）問題に関しても詳細な報告があります。しかし、かつてのODの問題と、現在のいわゆるポストドク問題の置かれている状況には、少し違う面もあるのではないかと思います。そこで、少し若い世代の意見・認識はどのようなものかということも明らかにしたほうがよいと考えまして、今回は比較的若手の、おおむね40代くらいまでの方々をパネリストとしてお迎えすることにしました。その上で、全体の構成としては、ミクロな現場の観点から徐々にマクロな政策や歴史の観点到げていくようにしました。

この後、石渡裕子さんから全体の趣旨説明と問題提起を行っていただいた後、榎木英介さんからお話しいたします。榎木さんは、ポストドク問題や、科学技術政策、コミュニケーションの動向をかねがねウォッチされてきたご経験がありますので、その観点から情報収集した若手研究者の問題についてお話をいただきます。

続きまして天野絵里子さんから、京都大学学術研究支援室（KURA）におけるユニバーシティ・リサーチ・アドミニストレーター（URA）の活動についてお話をいただくことにしました。URAという言葉は初めて耳にする方も多いかもかもしれませんが、研究活動の活性化やマネジメント強化を支える活動を行う組織を意味します。いわば研究を支援する事務方と言われる存在です。諸外国に比べて日本では研究支援者が少ないとかねがね指摘されていますが、そうした問題を解決する点で非常に有効だと思われまます。また、博士号取得者のキャリアの一つとしても注目されています。そういった方がどのような状況にあるのかを含めてお話を伺います。

これら現場に近い報告の後に、林隆之さんから研究者養成問題の背景と構造について、マクロな科学技術政策の観点からお話をいただきます。

最後に、隠岐さや香さんから歴史的な観点を含めたお話を伺います。他の3名の報告は共時的で、かつ科学技術の観点からのものですが、隠岐さんの報告は人文社会との関わり、あるいは通時的な観点からのものとなります。このように、現場に近いミクロな視点からマクロな観点到へ徐々に広げていくことで、科学技術立国を支えていく研究者育成という問題を少し立体的に捉えることにしていきたいと思ひます。

前口上はこれくらいにしまして、さっそく石渡裕子さんから開催趣旨の説明と問題提起をよろしくお願ひします。